

---

# 十秒の戦い

たみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十秒の戦い

### 【Nコード】

N5123S

### 【作者名】

たみ

### 【あらすじ】

「あなたは死んでしまいました」羽の生えた少女に宣告された主人公。生き返るためには、ある条件をクリアする必要があるそうである……。

「あれ？」

気が付くと俺は野原の中にいた。足元には花が咲き乱れ、小川がそよそよと流れている。よく見るとどれも舞台の書き割りのような妙な質感を持っていた。おかしいのは分かるが何がおかしいのかわからない。

「なんだここ？ 何してたっけ……」

頭の中がもやがかったようになっていた。当たりを見回しても人影は見当たらない。

「おーい！ 誰かいないかー！」

「はーい！ いますよー！」

「うおっ！」

見上げると、空から小さな影が下りてくるところだった。妙にコケティッシュな衣服に身を包んだ少女である。年はどう控えめに見ても十に満たないだろう。人懐っこい笑顔を浮かべる背中には、白い翼がはためいていた。なんじゃこりゃ。

少女は僕の目の前に降り立つと、右手を挙げて言った。

「はろー、天使でっす！」

「……………てんし？」

「天使ちゃんです！ マジ天使です」

少女は胸を張って自慢げに言った。俺の頭の中はひたすら八テナマークでいっぱいだった。いきなりコスプレ幼女が空から降ってきて、自分を天使と言っている。普通ならちよっと頭の残念な子だと思うところだが、少女のテンションに合わせるようにばっさばっさと羽ばたく翼は、妙なりアリティに満ちている。何がなんだかわからずに黙り込む俺だったが、次の少女の言葉に度肝を抜かれることになった。

「残念ですが、あなたは死んでしまいました」

「はい！？ 死んだ！？ 俺が！？」

「はい、覚えてないと思いますが……」

少女が眉尻を下げ、上目遣いで見上げてくる。確かに全く何をしていたのが思い出せない。俺はなんとも言えない焦燥に駆られ、頭を思いつきり振った。

暗い夜道。

翻るナイフの光。

呆けたようなサトミの顔。

「……そうだ、俺はサトミと食事をして、あいつの家まで送って行って、それで……」

頭がずきりと痛む。サトミは俺の大切な人だ。

「そうだ、サトミはどうしたんだ！？」

俺は少女に詰め寄った。記憶があいまいで全く像を結ばないが、異常な事態が起きたのは確実だろう。そして、そこにはサトミがいるのだ。

「……それは私にもわかりません。しかし！」

少女は身をひるがえすと、くるりと回った。

「今だけの出血大サービスです！ なんと、あなたを一回だけ死の十秒前に戻して差し上げます！」

俺は耳を疑った。少女が続ける。

「実は、あなたのように急な死を迎えると、直前の記憶をなくす場合があるんです。しかし魂が生まれ変わるためには、自分の死をしつかり自覚しなければいけません」

「よくある、死んだことに気付かなくて浮遊霊……とか、そういう話か？」

「です。そこで、最近始まった新サービス！ いくつかの条件を満たした方に限り、もう一度チャンス差し上げようというわけ。ふっかつのじゅもん」

天使にしては妙に俗っぽい発言が多い気がする。

「気のせいです。ともあれ、その十秒の間に死の運命を変えられれば、あなたは晴れて自由の身！ その後も生きていくことができず！ 残念ながら運命を変えられない場合でも、自分の死を悟った上で死亡できるというわけです。どうです、どちらに転んでも美味しい話でしょうか？」

確かに美味しい話だ。もちろん、美味しい話には裏があるというのが世の常であり、それはこの怪しげな天界（？）でも同じだろう。しかし、俺には選択の余地がなかった。サトミをこのままにしてはおけない。

「わかった。俺を戻してくれ！」

「おお、決断早いですね！ 好きですよそういう男の人」

「そんな小学生みたいな声で言われてもなんも嬉しくねえ」

「むう、失礼な人ですね。最近是需要も結構あるんですよ？」

「いいから早くしてくれ、サトミが心配だ」

「はいはい、わかりましたよーっと。それじゃ目を閉じて、姿勢を楽にしてください」

俺は言われた通り目を閉じた。少女が離れる気配がする。

「では、あなたをこれから元の世界に戻します。何度も言うとおりのチャンスは十秒です。その間に運命を変えられれば生、変えられなければ死。よろしいですね？」

「ああ」

「あなたは一度気を失い、次に目覚めたときには元の世界にいます。そこから十秒であなたは死にます。では、良い生を！」

暗転。

「」

気が付くと俺はサトミの家の前にいた。時間は夜。目の前にサトミがいる。泣きそうな顔をしているように見える。俺は

「！」

そうだ、十秒だ！

俺はサトミをかばうように背を向けながら、辺りを見回した。サトミの後ろには家があるので、何かが襲ってくると思ったら俺の後ろからのはずだ。残り時間を考えると、その「何か」はもう俺の視界の中に来ているはずである。その何かを撃退すれば俺の勝ちだ。しかし

「誰も……いない？」

振り返った先には夜道が広がるばかりだった。もしや頭上から植木鉢でも降ってくるのかと思いい見上げたが、それらしいものは何も見えない。

「いったい……」

背後でサトミが動く気配がした。しかし、集中を切らすわけにはいかない。あと七秒ほど、サトミは俺の行動を不思議に思っているだろうが、すべてが終わってから説明すればいい。まずはこの数秒を乗り切ることが

何か熱いものが背中から入ってきた。

振り返ると、サトミが呆然とした顔をしていた。痛え。

頬に冷たいものがあたる。どうやら俺は倒れたらしい。

「あなたが悪いのよ！ 浮気なんか、浮気なんかするから！」

うわき？ 俺は浮気なんかしてない！

俺は口を開こうとしたが、もう目がみえなかった。

少女は透明になりながら、女性が男性を殺す一部始終を見ていた。

「 十秒。残念でしたねえ」

倒れた男性から黒いもやが立ち上がる。死の絶望が形になり、魂を捕らえているのだ。彼女たちの力の源になるものである。彼女は腕を伸ばして、魂ごと絶望を吸い取った。

「ふふ。ちゃんと絶望して死んでくれたみたいですね。ありがとうございます」

昔はなかなか契約を取れなかったが、最近はだいぶ慣れてきた。彼女たちは嘘をついてはいけないという制約に縛られているので、発言にはいつも気を遣っている。

「やっぱり本名を『天使』に改名したのが大きいですかね。イメージは偉大ですねー」

彼女は一度羽を縮めると、大きく広げ震わせた。純白だった羽が、根元から黒く染まっていく。

「……さて、次の魂さんのところに行きますか！ もっと頑張つてルシファー様に褒めてもらわないと！」

彼女は大きく伸びをすると、夜空に向けて飛び去っていった。

>了<

(後書き)

初投稿です。

感想などいただけましたら嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5123s/>

---

十秒の戦い

2011年4月16日22時40分発行